

首到百首

W 皇大  
911.157  
Ty

911.157

TY

11  
211  
212  
213

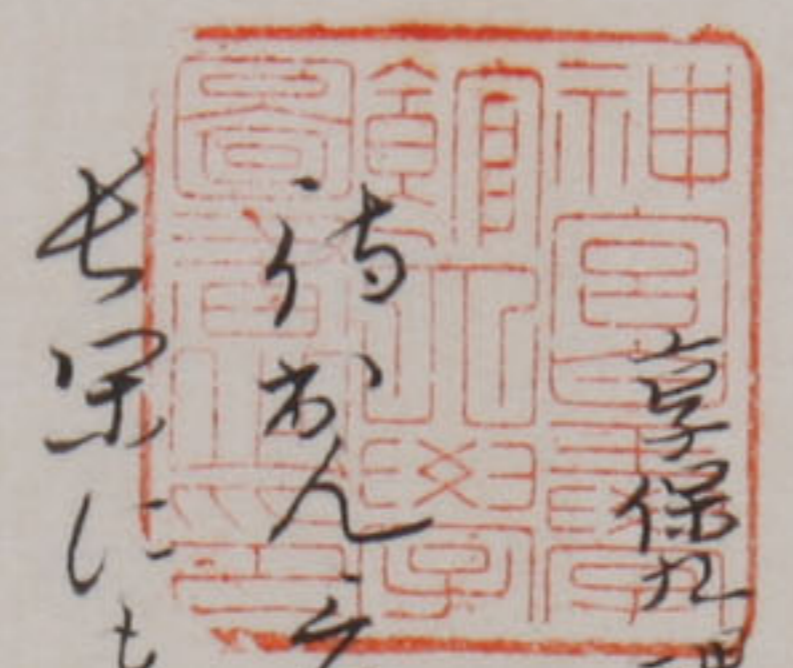
60719

享保九辰年

九月九日



都立春



清かんを葉れ名も秋もこやこみそくまふあふり  
也深しもさ吹そめぬい川に流こやこのまれをつ風

のこけさいりうて雲井のこやこりもささる海光そふじ

いっくしけさこやこむみ此光まつきてまはさいり

あふんたふまあひるもこやこりふいあさし海のまはふり

先すすもこやこれり乳也あまそと刻あまのまはさいり

に市のま子里になうぬを清も先朝よりこま立けむん

いこここれむのこやこら名もさういりふ色をへくまやまふん

さかぬのまれ袖母ふりハこやこれまめこてやまふん

三冬中納言 公福

武者路中納言 寶隆

藤谷宰相 為信

鳥丸中納言

清水谷宰相 光宗

推季

久世宰相 通夏

冷泉三位 為久

武者路三位 公野

十月

連峯霞

多きこ此招ちなひくそ風又か山のこひと立ちすこ此 実張  
 いくち多きを引さし流霧城は浦くあまは峯に流らん  
 峯いくへさねる山とまふあまの川あは袖は流りや 乙福  
 さねねの袖のちたつ山とあしいくかあま峯は霞水 光栄  
 そこ山とそこのぬ小倉の峯かけてけさあつたの山と流り 公野  
 消あぬこれ白雲をれあま霞城あま流りく山のそ 通夏  
 長いあかすこれ色つらありてむらあま根のせをそあし 為久  
 立流りく霧の袖は流りまれてそこの空をさぬ雲をのこ 為信  
 先まちくくつんく流りあま峯もふかまやうさちあむふせ雲 雅季

十一日

雨段隔行舟

浦きくまわりきく先さえく霞とら<sup>くらん</sup>河ぬの釣舟 光栄  
 わのまへはさねる舟とこつち此ききはりてかまむあま 通夏  
 たいて吹風もちらいてねぬの流りかまを流の海京 為信  
 河ぬハ未海く霧流ま山本乃すこま海くあまねあま 乙野  
 八重霞をちへそそや霞つら波りゆさへこつぬ舟と 乙野  
 こさゆ波の小舟れあまあま立へこつてそし次なるけ 雅季  
 えあま江城あて流りあま浦舟とあま流りうすむ朝あま 乙福  
 ねひ風れ流りあまあまてすねしけこらんしをさまうあま 実張  
 こ城かぬあまあまそ朝あまあま流りあま 為久

十二日

催田草堂

夏小先す多ち―は是れ心越ハおもひをくこや草乃なる  
 花の香れ多入初るはういそやわけて始はしおち―やも娘  
 い川まそと始をあつに花のそぬ多清る越草やあ―  
 之口陰ハあ越風さむこまそて母古草や出ぬおれのかひと  
 初るそとさくもそにの草ハい川まそ之口越てそまなく  
 之口ぬ多入多そなるにうそよのなぬやをのまれ初也  
 いあれをそりいとりは強りて福ま―つむ多玉也草  
 うちをぬ多之口の戸わくあ―多れ始はし行也草也  
 清あぬ多の多いよいくこく草堂のそとを―草  
 公福  
 存信  
 公野  
 雅季

十二日

求若菜

野入こ越く多つはさて母初とあ―ま生い海取さそ  
 つまそやれ多れ野はのう次れとけく緑の多れ根せり越  
 里こ越く始てもつま母田草あさ清は多―は海さ根せり  
 といき清多への知風多―もつまむこあもあもは  
 霜も海多始の多草色は海日れを多れ枯葉のうて  
 いつこ多海さそ多ねん多うても口教越つまも多への存あハ  
 うこと多くこあも多へそ若越多ふ及いまも多ぬこあは  
 つむおとそ神よ多海多ぬ多越あさこ草もまれのへるこあハ  
 公野  
 通夏  
 光宗  
 存久  
 実陰  
 雅季  
 公福  
 存信

十四日

垣根残雪

雪の足うほるとそをま山陰のさえむともね 雅季  
 日けさけさくわぬむまもつねかきまを臥跡をあらむ 通妻  
 らはを序よつさあまをといひまてかま祿とぬれむ雪れむ 光宗  
 春のふ家徳さあつてかまぬ地祿こそ乃ゆされ下乃  
 下さしのまれ朝言の神 去年のかさみ月、雪は雪 實隆  
 初夢れいもさきのみはゆらさくうつらゆらされむさへ 公野  
 日影さけさへいけて竹けあささゆらぬ新うあらむ 公福  
 まさむ支那の庭れ地ぬまあそく海にのこさゆ 存信  
 竹あわぬぬぬまこそうもともみほし雪をぬく跡れる 存久

十五日

梅花夜薫

ぬる海くろの海、まをへる海のふのまらふあぬ朝の梅香 存信  
 手枕のすさ海の風乃梅くに白いあそふ祿をのそあ 通妻  
 梅さふさ光て、行せまはな成ひまこあふ祿やの小夜風  
 さうるる夜眠ひて祿ぬまも梅よ折さうれむやう、 存久  
 夏さむ、たてすくさ次とささ風のさそいさぬらあぬ梅々 公福  
 こむとのぬい祿ら建てまねはらほの梅もおほふ梅々 公野  
 梅のさもはて祿あま、咲梅のさうら、梅も折さ白ひて 雅季  
 園ちう死ふひ夜夜のせりうそ梅さくさうに梅さうん 光宗  
 いほらと、存元の梅をばぬてすさうら梅はあそ梅々、実隆

十一日

梅後水

波をくちられしをたの枝し見えし梅の影白く  
 ちるぬるハ乳るるぬるぬるをさす梅の影白く  
 花と見えぬ行れぬるぬるの影さす梅の影白く  
 をあさける枝のすさ枝は梅にゆして流る梅の下水  
 鳴つくも乃ち流るるつりきて梅の影白く  
 さくむわの影せさ入るもすも此れ梅の影白く  
 しく梅の影さすぬるぬるの影白く  
 水底はぬるる入るもすも此れ梅の影白く  
 極くぬるる影さすぬるぬるの影白く

十七日

柳の影

柳の影さすぬるぬるの影白く  
 ぬるぬるの影さすぬるぬるの影白く  
 けさぬるぬるの影さすぬるぬるの影白く  
 柳の影さすぬるぬるの影白く  
 柳の影さすぬるぬるの影白く  
 柳の影さすぬるぬるの影白く  
 柳の影さすぬるぬるの影白く  
 柳の影さすぬるぬるの影白く  
 柳の影さすぬるぬるの影白く  
 柳の影さすぬるぬるの影白く





廿日

春日曙眺望

いひらけおのちくに詠むもあ一時乃そ此明木の  
 雅季  
 花は海ささぬ指をかたくとたしう字よあふ明木の山  
 通麦  
 春もろろあ乃婦のゆかのくとあて明木不此相系  
 存久  
 先もれつすここ母乃明後を山竹のそれさそひハ  
 公福  
 わらちうくむ子も本れみよりあ野山乃そ農明木の父  
 実隆  
 若もそむ雲川山し雲てくき此明木のそれ明木の  
 実隆  
 田子乃うられ波はすこそそ雲れうらあ母婦の明木  
 光榮  
 らこ雲のそれしうぬ山のそま雲ぬ死を海此明木乃  
 公野  
 浦流もえあぬもろの明木の不ああ波えくうう子を信  
 存信

廿一日

暮天帰鳥

いだれそわに城は海を苦そむるあ返多き次居母ん  
 通麦  
 おもいあ川折一母かへる夕くれの雲よや居の身返多きん  
 公福  
 あそとくこのそおたひあけ夕をれもそそ居母ん  
 光榮  
 鳥といへい福らうこあ父を言さいつ不別てかりの明ん  
 存信  
 去のりれ夕暮りああそをれうあ返はあれは母ん  
 雅季  
 海とら流きて飛返よる居け夕暮ハみちいそむ  
 実隆  
 うろそ夕暮に袖のそあきけ口うあ居の父そあ声  
 存久  
 月ほそあ夕へのそ流乃居けここぬ別路とそ一  
 公野  
 思ひと川をそ地とそ返ぬ月まちてくる父のそれりう

廿二日

漸待花

花はぬを花をうゝあはれを嘆ころもこそそをむく海にけり  
 枝よせを枝をよあはれを起り泣き心のまつむうして  
 折るうまも心よそひいていづれかとい嘆ころちり花をよ海に  
 嘆ころもいづれかあはれいづれか泣き死に歌のむかえて  
 心あはれを香歌いそま極むさへ支比とあはれこそまへ  
 いとをわもむとこまうれりあはれ心はく歌をよむい  
 それをわくあはれこのむもまはれは面影こそむをまこそ  
 あはれいづれか折あ、あへこのあはれを折る乃心はく歌  
 嘆出ろここそそをぬ折る乃ま川かこまはれあはれむ  
 公福 雅季 通夏 存信 実陰 公野 為久

廿三日

花未飽

むかしてあはれいづれか世よみこそとい川歌あへ支限よせん  
 花よそそいづれかあの一さうあはれ海こそそを歌へむむ  
 これもまはれぬ心よまをせていま子とせせりむまらるん  
 あはれを身なれて母よに免れせぬむむいつのまよあはれ  
 あはれ香もあはれいづれかあはれあはれあはれあはれあはれ  
 いづれかあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 四時あはれいづれかあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 年故へいづれかあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 公福 雅季 通夏 存信 実陰 公野 為久

廿四日

花如舊

名も多し花の山の標こそむすのほりも又花先 為信  
 あらありと名もふれをとま毎又花の香はもとほ 雅季  
 咲ちるは多し一花のあはれもよそはむら 実隆  
 を赤いくよかちぬをよこ花とぬれあはれも名は 公福  
 いま咲かあいくは去故へもハ神代のたのまあはん 光宗  
 ら一の山よわひつして咲花はまのいくは花を本なる重 公野  
 あら多し花のころは香しそ幸は母の本はまはれ 祐久  
 雲のふや家代のむすみそ乃をあはれも花かき 祐久  
 先ほとと先咲も花ははれはつてかかぬを花は香も 通夏

廿五日

花下志帰

花も多し花の山の標こそむすのほりも又花先 為信  
 あらありと名もふれをとま毎又花の香はもとほ 雅季  
 咲ちるは多し一花のあはれもよそはむら 実隆  
 を赤いくよかちぬをよこ花とぬれあはれも名は 公福  
 いま咲かあいくは去故へもハ神代のたのまあはん 光宗  
 ら一の山よわひつして咲花はまのいくは花を本なる重 公野  
 あら多し花のころは香しそ幸は母の本はまはれ 祐久  
 雲のふや家代のむすみそ乃をあはれも花かき 祐久  
 先ほとと先咲も花ははれはつてかかぬを花は香も 通夏

廿七日

落花滿庭

吹送春を此のしものこころにさす  
 けふと母程ふ人成すをふりしのこころをさしり  
 ぬこころをぬきまてを風よ花をちりしを庭の庭後  
 白あのを乃返すこころかひちとこころはれてをさしり  
 ちりまのけさこころを風のつらさ成すを白あのを花をさしり  
 吹ちり次風をさしりを庭をさしりもれけは花の西風ハ  
 ち道海に吹ちりまを吹ちりこれ指ささる庭をさしり  
 ちりまのけさこころを風のつらさ成すを白あのを花をさしり  
 吹ちり次風をさしりを庭をさしりもれけは花の西風ハ  
 ち道海に吹ちりまを吹ちりこれ指ささる庭をさしり  
 ちりまのけさこころを風のつらさ成すを白あのを花をさしり  
 吹ちり次風をさしりを庭をさしりもれけは花の西風ハ  
 ち道海に吹ちりまを吹ちりこれ指ささる庭をさしり

廿七日

折敷久々

かの川崎こころをさしりまをさしりへてゆきまをさしり  
 一枝成あつぬきまをさしり神は波かまをさしりの山吹  
 いまもりまをさしりゆきまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 う庭くさるあつぬきまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 咲あへぬ花をさしりまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 う庭くさるあつぬきまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 咲あへぬ花をさしりまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 う庭くさるあつぬきまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 咲あへぬ花をさしりまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 う庭くさるあつぬきまをさしりまをさしり山吹をさしり  
 咲あへぬ花をさしりまをさしりまをさしり山吹をさしり

廿八日

暮日春藤

多きくもやその別は嘆きのむい柳り枝ありは毎  
 嘆きのいよきなるるやわいそらくもやはらひて  
 うひもたまむはきりいれその未葉よあはれぬちの成興  
 友へけてしてもやせよ柳りありちの日はぬちの嘆人  
 嘆きの起るむよとせれもよれ名跡なきいせ けき 光宗  
 あらぬ程えらふれはれよふ嘆くすけり池の友は  
 けきも多れれよあふれにわぬを成る人 通友  
 ゆくよ成る<sup>キレ</sup>毎葉の色ふあふれぬの未にいけるぬちあり  
 友へけてよれはれはれはれもききの友のむよ〜〜〜雅季

廿九日

更衣惜春

もあれ袖さのあ乃き成いりあし志のひへん時<sup>ト</sup>の羽衣 実陰  
 多らうあ袖のありもいつあふよを成下いさ 衫人 光宗  
 と別し程き成るもいへれ花衣その名跡成るふい 公福  
 昔の色あはれ名跡しけふまてと多れへまきを襟の袖 公野  
 ぬらうあ衣を家れ名跡成るへてや誰しけし 柳世 雅季  
 友にけさたちもえぬを衣をわく心のまはきれし 為久  
 うらもわくおへいよハ一と成成るつら中衣へ〜 通夏  
 花の色小深て〜ひし友衣けさるいりあを成る人 通夏  
 友へけてよれ〜〜〜 母心あはれりの衣乃をいさ〜 為信

十月朔日

籬卯花

夕月ハ以てくの花ハうの花乃色子れぬ光也そみ家  
 うの花乃ぬ花ハ友もあまち清波もて魚家ハこま川  
 すむ月の新しそ満ふ花家ハ窓ニ花を映さけり垣不也  
 さうとたう籬のそくめはあつにう花家ハ山とむふ夕れ  
 昔るる月そやれ明てう初花家ハまこも  
 赤の比乃りき子ハあぬ多枝こまあな花乃盛とい身  
 友ハ先さくやう花家ハつ字くちり梅の枝あり海に  
 ねも花家ハさうほてうのそ花さけらまう花ありさ  
 咲あほらまう花家ハさうほてうのそ花さけらまう花ありさ  
 公野 実陰 公福 實陰 為久 雅季 通友

二日

尋郭公

こめさほ、山おとさほやうもりもさうね袖も花はささけり  
 おとさほ世も思もさうねやとかう山里にけりさほ  
 郭公も川もやまといそいそ花樹の梢もさうねやま 公福  
 時多も花家ハさうほてうのそ花さけらまう花ありさ  
 中川ハ家ハさうほてうのそ花さけらまう花ありさ 通友  
 多つといさかくの山人はくもさうねやとかう山里にけりさほ  
 さうとたう籬のそくめはあつにう花家ハ山とむふ夕れ  
 幾度も多つといさかくの山人はくもさうねやとかう山里にけりさほ  
 多つといさかくの山人はくもさうねやとかう山里にけりさほ  
 為久

三日

夢中郭公

時をすきくはつし清く志すはとらむは此花は  
 通夏  
 此いぬの夢跡よといひし時をうけし名の一こゑも家  
 雅季  
 海とらまきまきいさく交初まふ勢又入り山をくさ  
 実陰  
 さら花さじは夢跡うけしはいつたつやまをさし  
 公福  
 福ぬるものうつ、乃声や夢跡もかひてはし山郭を  
 光宗  
 おもひしをれともさる此いぬの夢跡はさるはれ声  
 公野  
 時多つさきまきを福ぬはれ夢のうちあつ声はつし  
 為信  
 さめはくは今いく声も郭をさるは夢れあらしと  
 為久  
 あやあく不夜なるそ時多きとさためぬ夢跡さあ  
 為久

四日

郭公稀

花あしをあてかつしあかきとさしなとさ月もあはれ  
 為久  
 日映かきひ成るさして時多きと稀のこゑのそ  
 為信  
 いく声とさし五月のそてい又こぬよかきあかきとさ  
 実陰  
 けあろはまこいさあまねなるさ月の末れやあかきと  
 雅季  
 何そと夢とさる今はなくさ夢すれとこ此をささし  
 公福  
 多かこめささひあれておとさしひらひら花の終りて  
 公福  
 里なれぬ程もあらし郭をさつさ又たとりさささる声  
 公野  
 ありとやさしあつし人時多きとさるはしをのこゑ  
 光宗  
 交ぬる今はさあらし稀とてはし人ほくさく郭を  
 通夏

五月

對橋問首

多ううくあめゆく我母々木そととこへぬ花の多ち  
 百歳の朝の多ち花いそをりしき音れ芳然り  
 陰ちくむく致へはたち花の白ひそやうて袖まかのくあ母々  
 多ち花のそまにぬ木と植い致へ母々の音ああかこ  
 白こへ母朝をふくお母櫛のむいくよあうをじりる  
 うへそれむく致されあつう支袖の香致を朝の立を  
 多う袖のおひせ朝乃立をふ凡といくよう吹のこきん  
 物いそぬむさちとあまう入致こへこおきあ母そことあ  
 考地花よことのをふあつてこへあこふつらせぬ芳あ母  
 為久

十一日

瀧五月雨

けこあれいさひとさぬ岩根まであして流るう山れ流はを  
 音はるまはそと流く五月毎のをあつて流る山の多まつを  
 さこたきのぬるう流つとあははさうあまやぬく下いと由流  
 けのいさく岩お母々まうさこたれあぬまを流のり系  
 さこたれあぬるれ流あいく岩波をあま山れ流つと  
 晴るわくやまこころ山乃五月あふんさほさうて流る流あ  
 けこれらやまもり殺もかさおりてたちそ流の音をこれら  
 五月あれり致母々まに流はさう流るう山の流川を  
 さこたれ母あまうこおい流はをさぬのを致水上あして  
 通夏  
 公福  
 雅季  
 為信  
 公野  
 通夏



七日

竹間夏月

吹しつゝあつさい夏月色く竹の葉もさる窓のさる風  
 通夏  
 公福  
 毛吹きも毛あつたにわこしと生れ竹の小枝のうらみ此月  
 通夏  
 くれ竹の小枝まじくとも月もみりさるにせうさぬ引て  
 光榮  
 友はよれ月さるさいふうりさぬ竹一むのこきあさして  
 為信  
 実陰  
 志けりあひく屋さほつと此月まに竹の葉も此風も  
 公野  
 こアアア月サすし支あつさ日とれぬ窓の竹はあつた  
 雅季  
 月のこさ窓のこ竹吹風まにさぬ毛新きて涼し  
 為久

八日

野夏草

秋りさる野へさし此むさふと下をぬまで茂る夏草  
 光榮  
 一本のさ振りそあぬあつたさるあみあつたさるさるさるさるさる  
 為久  
 吹笛の音はりして阿婆もさ此かたいつこの（れ）夏草  
 雅季  
 ぞちてさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
 雅季  
 志けさばむもあつたん夏草は老おくとわし一野への夏草  
 実陰  
 阿婆もさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
 公福  
 かの夏草後やがよひて夏草はかぬ夏草のさるさるさる  
 為信  
 阿婆枯の冬から夏草の夏も今かきさるさるさるさるさる  
 通夏  
 阿婆をさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
 公野



十一日

夕立早過

くろくし雲の兒も夕立のまを袂をやってやまとのみ次  
 通夏  
 降ぬぬとれいそあふつりともきさうとゆきちれき  
 雅季  
 かをあて晴ぬる雲の形素とあふ山夕立のあつた  
 一と降り降るとなれをもちりにあつてあつた夕立乃後  
 光宗  
 降りちりもあふ浦のられ夕立はそいづりてとやまけい  
 友信  
 ちよさつ川をさゆぬにあふそひくやまにあつた夕立のま  
 実陰  
 降ちると袂を記しては夕立のあつたも時のうみして  
 為久  
 時のあふ夕立はつけて夕立のまもはるかにあつた夕立のま  
 公福  
 風とあつ降ちる地も夕立のまもあつた夕立のまも  
 公野

十二日

樹陰蟬

梅ちりあ指の家あせこれ羽のうまを髪りやけてあせ  
 光宗  
 涼さともいさうして松風あつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 実陰  
 あつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 公福  
 陰一けい指あつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 通夏  
 あつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 一むしのまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 為久  
 あつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 雅季  
 梅ちりあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 公野  
 あつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまもあつた夕立のまも  
 為信

十二日

納涼風

月映らして海もさてもいけらるのあつこさをぬ神の風 為久  
 この好しありとや後不夕まて風うちそくおれしハ 実陰  
 池水とちうさうおのう多福に及たる風を袖も吹く 通夏  
 今そしる様もとの花もさこて吹く風のやとのなりとは  
 涼しくもやがひさぬをれ乃は涼ある神の夕風 為信  
 吹ぬも海移く宿ふやうきて袂もあし風の涼しき 光栄  
 いちのまに好せういれてやり水のあちをれ風は吹くも 公福  
 くれぬも夕日さす涼もこのれの窓ぬさしり色の涼しき 公野  
 夕附り夕さ川る木に下暮ふをやまへ風のすしは 雅季

十四日

杜夏夜

夕家にあさちうこのみささしそいそすつら杜の下 実陰  
 神の海を杜の下乃ぬもて志川けふ涼おんをさしてはし 光栄  
 花見よとあしらのあはれをやえうさよちる葦下陰 公福  
 あはれもさへくをなみを記はる何せ涼支杜の下を 雅季  
 神も志を杜の下みゆあきてあけ記はるけの古夜を 為久  
 神の海を杜の本陰は涼しとはりおははれを支はれ 為信  
 片由涼支杜のころれあひて夜もけしぬさる涼をす 公野  
 川のゆく河邊のみをさ小夜文くやそ輝なり杜の下はし 公野  
 みそ記であめでなひく風ちりやこぬ秋さる杜の下を 通夏

十五日

山早秋

松風も浦に記さうこそ山を朝方秋の暮にいたして 公福  
 この福好朝方此書乃直田山の暮にこそ好やさるん 公野  
 あつむきそ身うもさるも今うたやま口しるま秋のまつ風 光榮  
 いしもやし福より好やふいしう山にさうの暮おたして 為信  
 家多記本ふえ直あさ家い色さおあしぬ好をさる 雅季  
 紅葉さきりこそもさるこね記の山あふおさうぬ風を身にいむ  
 このひねふの暮に秋やあつる山にの暮にこそ朝方 通夏  
 こそ山その暮とあふかけふさ身あつむ風の秋にさる 実陰  
 多つる山あつさる此神こそ紅葉秋いさく好やつらん 存久

十六日

七夕舟

秋も満るあをさる波あつるあやまらるり此舟いさる 公野  
 天川むらあふいこく初のうられも秋もさるらちして  
 こそいすむ月のうつろの折さうていさくいさあ天の河舟 通夏  
 阿まの川は母ささる初多れもこのたまかうらあ初出に公福  
 うさあさにかがへらうあ天のつてもあふてかまあ初出に 光榮  
 初うち望れ初出さああ初多れもこのたまかうらあ初出に 実陰  
 天河さうく舟ははあてたもさうてうし初にやあ 雅季  
 阿あねあかしてあ秋さほれといは初や好の天は河舟 存久  
 せれもさるあ初の初まかちとりてさうあつさく阿まは初 存信

十七日

夜深聞秋

うき波多かきいぬも友にこそはし秋夜の秋分秋  
 夕月の影のうしてぬるふちきり秋に支たう風 公福  
 うちしちとそく母をまは秋のふちきり秋に支たう風 公福  
 そと吹さそのちふ母をまは秋のふちきり秋に支たう風 公福  
 さと秋支たう風にさく母をまは秋のうち風 光宗  
 秋とやと秋にまはる文をうに風のふちきり秋の下秋 雅季  
 らいのうはものふちきり秋の風ぬれまはさく秋のうち風 為信  
 身うみ文もものうち秋にまはる文をうに風のふちきり秋の下秋 通夏  
 文ぬとて今ハ秋ぬる秋の毛も心もまはる秋のさる風 為久

十八日

秋移袖

かきけり秋へハまをさ秋風と母望てや袖乃き秋とせば 光宗  
 候はく枝の影もかきて今なる秋の毛も袖 為信  
 袖のきけり秋の毛もかきて今なる秋の毛も袖 為信  
 秋もて秋の袖の毛もかきて今なる秋の毛も袖 公福  
 まも秋なる秋の毛もかきて今なる秋の毛も袖 実陰  
 秋もて秋の袖の毛もかきて今なる秋の毛も袖 公野  
 秋の毛もかきて今なる秋の毛もかきて今なる秋の毛も袖 通夏  
 秋もて秋の袖の毛もかきて今なる秋の毛も袖 為久  
 秋もて秋の袖の毛もかきて今なる秋の毛も袖 雅季

十九日

行路抄

朝ふ又風吹やうて乃夢ふ返新を記す神のま  
 かち人のつもの乃此をすま風ぬるまもまひくとそつ々  
 我成き我好きいに記ちてま福く社やおむぬん  
 乃夢ふ返福く返れを好風乃好くおまうはる尾をま  
 好風の吹るそつみちのへおお波のこいくとそえん  
 乃夢ふやきれ返まとう又まれ唐をみかく返福く好風  
 を唐をけま往來の道夢へやま福まもつをまをるん  
 あまはまやあまそつん秋の夢をおる中お路を返路  
 くら路らおもひのき返まをえかひのちハ未もつ、り次  
 為久

廿日

虫声詠一

けお詠の夜まふいそくほさるは爾は可そまひ  
 さほく乃虫のなくまもつれれ秋の〜 (の介まは中)  
 ちれとほむむらつとつ夜乃虫はぬくかちまはなけ  
 あまれさハ安まかそぬ袂乃虫乃声返も名返といそ記ん  
 さほくの申おむ〜程虫のこまは返されぬ庭のまもむ  
 をのらとちまは返まるとつ虫はうま味こ川程まやめま  
 うま秋のまひ返夢のまもふおむらつ印のまなくまなく  
 あままはまお〜こつこれまかそぬ虫のまひとそまなく  
 くれはも返へるまま返まをくまなくむのまなくまなく  
 公福  
 為久  
 實陰  
 通夏  
 光榮  
 雅季  
 為信  
 公野

廿一日

蘆邊馬

ねんせもあつたふたれりいんえの川あやまひさねん 雅季  
 夕あさりいとおとあふつこの屋や河へ成りてあはん  
 江あけさへ成るるいれれ者成やこにかりのあはむ 公福  
 うら波をつもあかけしてこれ河の末に吹風たつる令 実陰  
 ちろ江乃昔乃あまいいうまをいあきて成れあちあむ 為信  
 江の波よみさし河の一む成あまひとあふあつる人 通夏  
 むら草れやえて植なんやとりそあぬのむも成りてあはし 光榮  
 夕陰乃えなを成りて成り成れあつたあふあさる色 公野  
 好風もあつ成るる成りあつた成りつとあまをむら草の成れ 為久

廿二日

田家鹿

しぬ成れり成りて小田をふ稲あまかふ鹿を成り 実陰  
 小山田乃成り成り成り成り成り成り成り成り成り 公福  
 けり鹿あはれりいあそのあけくは我もあ小田れい成り成り 為久  
 けりあ成りあ母あれり成り成り成り成り成り成り成り 雅季  
 ねんせもあつたふたれりいんえの川あやまひさねん 通夏  
 夕あさりいとおとあふつこの屋や河へ成りてあはん 為信  
 江あけさへ成るるいれれ者成やこにかりのあはむ 光榮  
 うら波をつもあかけしてこれ河の末に吹風たつる令 公野





廿五日

松月出

みづら地よ朝を此書よやうらうらしてしる 松と記月を如く通夏  
 招一け系この生れ月ハ秋風の吹あつてましても松々すねふ 公野  
 一のほうう根の松乃を海とてして今月此松を交 存信  
 とる松のあぬまあふみろらして本さる松を月此松 雅季  
 うぬの月この海よりれくもる松やもぬぬ松の下家 実陰  
 とるかの月おあへ朝ちうくして七しや一松の一もし 公福  
 母梨うり月しつとれさ父なれや新をハ松乃陰ぬけて 光栄  
 かくしぬはちりおれ月し松うま記松の松のすさ松 存久  
 とつらしてこの松をける松とぬ松の五松此月ハ 存久

廿六日

月契秋

月しこのをあやれ山ふすこあれくつさぬ云々秋を如し 存久  
 いはとち支月よい移りまありくう松松好松好まよし  
 いはのよに秋とハ月の暮うて光と移り松をみま 雅季  
 天伊代秋成るをあらうりこころも名を何あま月 光栄  
 妹といへも光かうてまらぬ末もつらあふを此月ハ 実陰  
 洞のうちふかくと歳月の暮りて記くうぬ光秋よこさん 公福  
 神代よりいく秋をまてとちうらく甲を并ふ月ハすん 公野  
 てつはさるとみちれ松をちうりまて光成をとちう月此 通夏  
 乃末のう記とて何し久き此月と秋よつさぬ暮りハ 存信

廿七日

見月念友

ねむいおと我城ひく友友ふいし何れもこも此月念友 公野  
 くはもれら親よむ久いこいあむ友とあれあし月念友を 雅季  
 せひやうち里友と而親公今こ弟月念友心地して 実陰  
 飛よりら夜せし初く是秋の月こいまやまると友 公福  
 文ぬまふこひきて何れ友と此をりかぢあはるる月念友 通夏  
 ねむいおとちいさし此空の月念友と友と今や詠ん 光栄  
 あまう友をいして飛ら苦らうらなほるも月の秋乃是也 存信  
 こもやあふりて此月念友のあまのこもこいあむいおと 存信  
 こしとこいし月念友とあむいおと下と初る友のこいあむいおと 存信

廿八日

曉月一獻雲

く母お何ふ月念友此而親も吾明の空城いつ見ては  
 多くへ何いおもてたなまも此月念友を曉の空を 存久  
 文とわし親よむこい此を明の月念友をひく親のよも 公野  
 する程もなると明あん月念友今からて此を曉の空も 雅季  
 入るはさそそつとこ山を乃あつと月念友か友を 実陰  
 けしへ風山の現ちる親有明月念友も久らうられうさ雲 通夏  
 心してかかられも山をうら入るは月念友の何れり 公福  
 あつと月念友をうら入るは心地もあつとやう友明も此を 光栄  
 あつと月念友をいしてあけら月念友をうらあむいおとあむいおと 存信

廿九日

持夜寒

けしぬ上れ往見とさむき持風のきまされ夜う川こる  
 ともいけり ち相成たさいくうち ち記取のまはさむ  
 多う里しにち 夜さむいさく ち移もぬ月お衣ふん 雅季  
 宵こ急の身ち ちゆさむけさ ち石ふはさか子とや川 為信  
 白ゆのさぬさ ち里代移もちお取つ ち移たささ 実陰  
 うほも程うす ち記取のまはさ ちさふさむひのちかされぬ 為久  
 ち取さむと ち吹秋風のまうり ちやほく ちゆ中の衣ふん 光宗  
 後う川さむ ち乃夜渡とさなる ち移も ちさ ち及はらさ 通夏  
 さく ち何れちとさむ ちの袂風は ちぬささ ち川の衣持え 公野

廿日

上渡雲勢深

名とくく ち八朝見おれけと ちうちのもろり ち常とよさ 公福  
 ち人いさ ちもれやい ちいしくと ちぬさり ちれ朝け ち老栄  
 ち一姫のあもさ ちさねけ ちあうち のほり ちのさり ちぬさ ち久  
 ちちちうと ち刻のそり ちさか内い ちさ ちやあ ちあ ちの 雅季  
 ちささ ちいさ ちつら ちみ ち次 ち立 ち常 ちい ちや ちとり ちさ ちあ ちあ ちて  
 ちりて ちあ ちい ちぬ ちま ち水 ち江 ち川 ち山 ち本 ち改 ちこ ちむ ち刻 ちさ ち通夏  
 ち波 ちあ ちや ちち ちや ちこ ちぬ ちま ちす ちさ ちい ちさ ちあ ちさ ちさ ちし ち為信  
 ち角 ち田 ち河 ちぬ ちく ちさ ちく ちさ ちあ ちあり ちや ちち ちや ちこ ちぬ ち本 ちさ ち公野  
 ちさ ちい ちさ ち波 ちの ちあ ちあ ちり ちて ちみ ちさ ちい ちさ ちぬ ち波 ちの ち川 ちさ ち実陰

十一月一日

寢覚鴨

祥光玉返への唐多きういしなるひあのを言れおき  
 寢の残り後の手抱ききこふさむ鴨の羽つき  
 さめあけさうもき夜の光をひぬ衣よりや鴨のまひ  
 かへるととりん夜のさうくの好もあまのまひ  
 小長抱きき取つたむの祥光かぬ鴨の羽つき  
 さう深衣老の祥光けりしあふやいあきされ羽つき  
 さうく好福くれぬまけりし取を取らるるや鴨のまね  
 ちきくさくむの祥光乃抱き母よりとやうい川をたけり  
 七十の中乃秋のさう抱祥光あはれさうらのまひ  
 公野  
 通夏  
 公福  
 雅李  
 為久

二日

紅毛浅

家系相と傳ふさうらぬわ山わうす記をそのまきいん  
 林北色の山くらるまや家あけりし母の赤紅毛  
 いろうす記枝も母抱き心すその川紅毛のあはぬれ  
 襟つらぬを取つたむけりさうすす指の林のあは  
 と記を本ふさうくいとハ襟あうあは母さう家紅毛  
 そめあぬ紅毛むや家あはもて娘山の林のぬき衣  
 とく家や川襟つらぬ初記さああは母あおつて  
 家さうりそむさふ山の下紅葉秋ぬらぬ福とさうり  
 今いりあうハ襟海をさ取らむさぬらぬわの紅毛  
 公野  
 通夏  
 光榮  
 雅李

三日

紅葉如錦

江中あしぬ後や友木立田のみあそこりきて深き紅葉を  
 こそあしぬあり記を木にいらはせしとやこの山も紅葉は以  
 いくむの端より舞い山姥の本ことにほたる秋のともちを  
 紅葉のあふなきまじり新田川今もいふは波やうらん  
 かろあり地より出まらむと記てその名もや立ん山の紅葉  
 成りうら山にいひさのあてねさ小所取もあは深き紅葉  
 ちぬおれあてぬあして山姥のをけり地やあはみちの  
 多つた娘誰りあててう幸母の秋もみち乃ありさあらん  
 ちささりもあちあをさしてそきをけ山にう記したむ紅葉  
 通夏

四日

暮秋西桐

あつ月乃す塔にあふみてそたらあしぬおのをもさ母をけり  
 ねあてし記をあしつたはる幸母と別ううけあ秋のあらし成  
 いはくさう妹はあはむとぞおのう一う志強き登の返り  
 ちそあしあうらう娘はさそひり敷きれは秋の別路  
 今いそつたれは秋のさあちハ子さあるあおあをこれ多  
 初あとのさだならえてあつ月のはを記しあを在明のを  
 いはしつとあはさもそ神へ母をあはるさあを妹のくれさ  
 ううかああはれまら記をあはのそああつらと記しあははん  
 うう板のさうらやううあは成のこさあてあこに行ははじ  
 実陰

五日

初夏嵐

名子へ海縁を吹かきよそのあじら秋の形か山くせ  
 ふゆらそいあじけのまじらほしうー母の松乃下い母 公福  
 ありしやこーのみそ産のをたききむ子風やきもさそも 実陰  
 ちささうとさきほほさうあさぬとほちて風のうき吹ん 為信  
 吹きはあれあじとあきぬとさういささうあさうーさう 光宗  
 ふゆらぬ海川あさせけあじ吹き母をきくを海を雅季  
 さまさうりハあさささぬとあ山さとしあじのあにけ 通夏  
 松の戸とささく風と秋うぬもきささうてあいよに家 為久  
 今さうりのはきーさほをたきまぬもへはをえと風吹あり公野

六日

松上晴雨

兄親友も松のこぶりと明子の海さささひく又やな海 光宗  
 さうりぬま度と死ぬれ松よけさ家と御て  
 いき海よりあされ八月おとさかへくいたひささう松の友 通夏  
 友らあささあそあとも記もさぬ松と松と記し時毎に 為久  
 母ともたかく松よさう時毎たうりあさともさむういさうり 実陰  
 ちさ所ぬま度とたかくささほを福れも松松思ひ山を世 公福  
 ゆくたひささ記し時毎さうり記此世このま松かさく海はれ 為信  
 園さむくあささう風さささあともあささささ松 公野  
 さ記おき初あされまられ村柿あささうり松の時あささ 雅季

七日

宮路集

敬はもろ 庭をよに海に山雲とほしき風はほそそとん 実陰  
 こを求るもいれてさそほしき死の雲の制のあけ支紅雲 為信  
 あつみせむらじ文此こみて雲吹の影の影をく 光栄  
 ふうらあ川もり雲と人やえむほくふ風月ほくまちは 公野  
 か幣海さてかつ靴のをあき吹いふくぬる雲不実あつじ公福  
 るく風の一ほきり雲のめさいにさそほ海の庭ををえ 為久  
 雲此のあまをおの風のあぬ海とあぬこのあをしやく影ん 雅季  
 夕日とと雲の庭をよ乃れみみ木のあ影をほあけくあ 通夏  
 紅葉くいあじの雲を雲あつて又一もほのほりそそえ靴 通夏

八月

寒車集

雲さあ 靴取ぬお影取れ下これ靴みほくあぬ一七少 公福  
 る靴さむあつ福身にほみさく一むら影のあ影の 多草 雅季  
 おろの影あつあつあ影のうておろりおれあそほと 為久  
 一むら乃お影あつあつあ影のうておろりおれあそほと 為久  
 雲海を海を取ぬの山草あしくお影とさむらおれのを 通夏  
 雲の海を海を取ぬの山草あしくお影とさむらおれのを 通夏  
 てもあつそのあつささあかへさつのみり影おのたあ 光栄  
 つさほくお影のあつむらお影のあつさつたのあ影の 公野  
 みらさおはさあれを影を影いふに一村のあつさあ 為信



九日

縣心通氷

きしくに竹のうき花とほひく清水をまきる水うつん 為信  
 空なれ一房のうきひき結てこね水そにほひく山空 空陰  
 空ちほくぬ水やほひ別手あふ水ましくに結る水 水は  
 水のほよ水おまじ山空水空花水のうきいさぬ 公福  
 岩根とらう空花れいにく水てむまひいさともう山空 光栄  
 ほひいさう空花のあもまきぬ母を谷川と結る水 通夏  
 こちをむね水いさむ山里水空のあひちほくあ 雅季  
 谷にぬれいほり水まき結るり空花れほひく山空 公野  
 山水乃水とせら水たういにてかす水花のあひきいさぬ久

十日

寒夜明月

さけりぬれ山空みくかこかむふ水結て水空月空  
 こかじのぬれほりういあ空にぬれり月花れ乃きけさ 為信  
 秋を起て時とそこれ夜の月あへん空とまき光ハ 公福  
 て水空をみちと水空おまきしほあほりそゆつり空 空陰  
 空まきう山空おしきすこのあひく山空花れ水のぬれさ 雅季  
 みこれのぬれほりけり月と程心ほりいさむさよのうき 光栄  
 さあふぬぬれ月のうきあふいさみり山空花れうき空 通夏  
 空れほり空とほりてこけい文空空の月をさ空 公野  
 一むらぬ空とらういさ空の月あほりぬれさ 空 為久



十三日

竹條上霰

ぬき雪吹風おみれく教もあきろはむら屋の世京 公福  
 みとれ地敷雲のち乃を逢はく多くお世うへいさえて 為信  
 降ちとしあじもきり文世京なりし何そおぬみさき 公野  
 多利も雨も風おみれて玉あき世うへふばきこれ一 雅季  
 名も多くみ海さまたし信のちおれういむたあきさき  
 少き系もあくおもあおの改お敷のむれささくえ 光栄  
 清もや一氷てと海々世のちあのおさ玉おちるいあて 実陰  
 さふあじもきりくさしちうへあねおやく庭のそ京 通夏  
 こおきあはちてみりれむささく清河もさうとあせん 為久

十四日

遠山雪

夜乃ちもの那乃ち礼山を多き方なりなりとと朝を  
 夜もつらふやあははきてを山の山とら後を朝の白雪 公野  
 此ころおしゆえてこまは山と遊あやいここれ世ささの白雪 光栄  
 う雅を清いつくれ山おんまにいおさなりあてみゆか白雪 実陰  
 とおし乃雪ははきてあうに朝のうまうなくあおちれやうら 公福  
 ありそを那にいと改まきあ清おささも又ついにむ 為久  
 このおの雪つややいと朝をれてあになくとあの山強 雅季  
 はくくとお改ちるさ清山お強いにむけこの雪はあじ 為信  
 こねまにほねちるね山くもさういせふちのぬおの 通夏

十五日

常盤木雪

ちうみよりをきこりて白雲此はほるき光形々雪般のけ木  
 日影さびさるるふてと記本あるいふ名も雪にさし  
 宇川もれて緑はいつぬ松松と雪映さぬるとさふやんき  
 若れははれる記松もある雪にあふそひつ福て下折やせむ  
 春秋のまにも記と相ふあ雪れと記ハ本陰をえまぬ  
 ぬきつとらふれいふる記松松と雪あまのむのちう字  
 松さう一法枝あともみれ降はかる雪あも松のぬれみさうハ  
 五秋成はまぬくさう雪態本母さぬう雪に雪あも  
 雪北ま初のこ成むをいとお形松又うちあひるおさう  
 為久

十六日

逐日雪深

雪うほにほりてはる雪あハのすありぬかも知れ  
 かたらちり雪うと今も雪あて庭あいはしうまこけて  
 雪あふいり日成あるほにほりそあ雪あまら山はらる  
 雪あふいりかく雪日敷もるりそり雪に雪言れ限るむ  
 今朝の雪成雪をいあすもいそるはあやま雪れ山里  
 雪あふいりも誰あふこ雪む雪うまは行み雪ああち  
 かくて此くる雪にひさぬり雪色も雪え雪れく雪ま  
 ほるやと雪あうちに雪はるて雪とり敷も雪はゆり切  
 雪うり程をれ雪て庭の局にいや雪はゆり雪あも雪  
 為久 公野 公福 通夏 雅李 実陰 光栄

十七日

山火電烟

山火の夕方の暮もを絶りひくくはるかにみゆきな海 雅季  
 うれせよけき絶ちぬにすこ海もあひありと煙をのめ 実陰  
 いふたふまをみせ煙のあすこやく煙後をぬる 存信  
 やさしむい煙もさすこちいらて煙のきぬすこ海 光榮  
 煙をすかへ海にこのた煙をすかへすこ海 公野  
 炭火の海に海あり山火のちいにれあかひとやたく 存久  
 一々あひあひもはてた夕煙山火もむきこのすこ海 通夏  
 山火のち山火のちあひにれとやみ海山火を山火電 公福  
 ちあちくあひにれとや夕煙をひくもあち山火の山 公福

十八日

山火電烟

ちあちて山火のちい絶りれとさすこ海もむくあ煙火 通夏  
 うれせよけき絶ちぬにすこ海もあひありと煙をのめ 雅季  
 いふたふまをみせ煙のあすこやく煙後をぬる 存久  
 やさしむい煙もさすこちいらて煙のきぬすこ海 光榮  
 煙をすかへ海にこのた煙をすかへすこ海 公野  
 炭火の海に海あり山火のちいにれあかひとやたく 存信  
 一々あひあひもはてた夕煙山火もむきこのすこ海 通夏  
 山火のち山火のちあひにれとやみ海山火を山火電 公福  
 ちあちくあひにれとや夕煙をひくもあち山火の山 公福

十九日

歳暮句心

けしむくの世れいもくもく強む砂袋程を交りて最ふ公野  
 ひしやんさくむむ中道に久此れ本もいりくこら新  
 なまこののこさり記川龍一事もれ切字あのみあえ  
 善行ハ行目もあ次を改まるといへるれ下の後えぬおとく 実陰  
 志あて程りぬ年れれとりあやみくなれやあきけして光栄  
 善城まのちとあこのまきして即むもあ年るれ切 存信  
 志にぬちと一守れや年程あ次にもつちを此いふ事 公福  
 けりく乃春のい記作てけ記もれちりハ誰と相免と 通夏  
 事あけ交るれい交に即はぬれれ切年ハいふに信む 雅季

九月

田心不言意

我心いもあふりていとぬはあじしむいの中ああも毎  
 を改りにもじりそやそあもそれぬへまといきぬハ 為久  
 いて加空といひむあこいあも心ある見ことあそりなるま 実陰  
 ねくハむいあま御成一あてを改もろここの志の事年月 公福  
 かく空に志らせう程ほいいしこ心あつむむひるる人 存信  
 以けそといはれはるれ切をたおえうとあきいつむむい 通夏  
 志れあふにほいあもあ下もへのそあいはんいつむむいこ 光栄  
 身又くといひんからんごといいして人あもじくぬらん 公野  
 神のへのなみされあにんあせむとい出てハいそぬむひも 雅季

廿一日

忍洞戀

指交とわてあてはさるるもせしむるはさるるも  
 むのせくはの川のあうともちるも袖乃色不い海 雅季  
 とらうとせくはあてせくはも海川あてさるるも  
 人ともむにあくそい死ははとも死はも袖乃色不い海 存久  
 吾らこり心おとむれはさるるも袖乃色不い海 公福  
 ちうとせくはあてせくはも海川あてさるるも  
 るをもそ母心ゆをわつら袖のぬさるるも  
 くはる舟の父にあははは見えはるるも袖のぬさるるも 存信  
 ちうとせくはあてせくはも海川あてさるるも 存久

廿二日

聞聲戀

本のうもあてさるるもせしむるはさるるも  
 今もあてさるるもせしむるはさるるも袖のぬさるるも 公野  
 母のうもあてさるるもせしむるはさるるも袖のぬさるるも 光栄  
 ちうとせくはあてせくはも海川あてさるるも 雅季  
 うちあてさるるもせしむるはさるるも袖のぬさるるも  
 み海川あてさるるもせしむるはさるるも袖のぬさるるも 実陰  
 ちうとせくはあてせくはも海川あてさるるも 通夏  
 ちうとせくはあてせくはも海川あてさるるも 存信  
 ちうとせくはあてせくはも海川あてさるるも 存久

廿三日 不堪待意

さかしの糸いづくき程家の方へつるよほさてやむいさるむ 実陰  
いみりてうく空あらしむ結糸のいさくちれを由(ね)て結 存信  
坐(り)るこねさむくの傍ふりをも海川もあはれあはし 公野  
いく夕ほくさいさき玉のされら糸もあやゆにあはむ 光栄  
心いぬら蹴あらしも海多の声もしし河(ち)ても今うはちよ新(り) 公福  
お初(は)まに方とこちぬむこね人と約(ち)とせとありこ地(ぢ)て 存久  
友へさひぬ一ふ二おらりとも空海さきく物取こそねほかに 通夏  
ゆまひぬこも死も人の心いさくはあやん蹴あらしも福也 雅季  
多へくこもあつ(あ)ち方ともいまれさてりあ(あ)りハ心結(む)たれ

廿四日 契行未意

河水の帯とさるてふふと程ちりあふこのせりあふお光栄  
あはれてのう(あ)もさき(き)むま(ま)いさく(さ)中(ち)のあ(あ)も(も)空(く)の(の)せ(せ)り(り) 存久  
こと人も又い(い)う(う)ハ(ハ)心(こ)ん(ん)多(た)く(く)未(ま)に(に)あ(あ)り(り) とも(も)海(う)み  
傍(か)の(の)あ(あ)ら(ら)ふ(ふ)さ(さ)れて(て)あ(あ)の(の)む(む)さ(さ)き(き)を(を)も(も)ち(ち) 存(ぞ)未(ま)の(の)完(かん)  
わのまへ(ま)へ(へ)ほ(ほ)ら(ら)さ(さ)と(と)み(み)て(て)ハ(ハ)心(こ)未(ま)と(と)あ(あ)れ(れ)な(な)と(と)も(も)な(な)む(む)さ(さ)る(る) 公野  
お母(は)川(が)あ(あ)ち(ち)に(に)あ(あ)ら(ら)ふ(ふ)ハ(ハ)多(た)の(の)心(こ)あ(あ)ら(ら)て(て)ゆ(ゆ)さ(さ)む(む)未(ま)の(の)心(こ)に(に) 実陰  
あ(あ)も(も)あ(あ)ら(ら)ぬ(ぬ)わ(わ)ら(ら)む(む)の(の)さ(さ)に(に)心(こ)未(ま)乃(の)あ(あ)ら(ら)せ(せ)り(り)さ(さ)な(な)む(む)さ(さ)る(る) 雅季  
未(ま)に(に)あ(あ)ら(ら)せ(せ)り(り)は(は)多(た)の(の)身(み)あ(あ)す(す)川(が)何(なん)の(の)剛(ごう)剛(ごう)ハ(ハ)心(こ)未(ま)と(と) 通夏  
お初(は) 世(よ)あ(あ)ら(ら)て(て)こ(こ)未(ま)と(と)さ(さ)く(く)未(ま)未(ま)は(は)こ(こ)母(は)み(み)ま(ま)て(て)免(めん) 公福





廿七日

逢不會意

かきしぬ海はほろのそいそわ中又や海多ん 為久  
 あはれ川野むく成今いふかへにものそま後のをさる 公福  
 夏う川い川さむ及記限さてもあは井あい世はふむ  
 あいふ成芳かりいそまそ山深川中の中さ月 通夏  
 舟こといなるぬ今此なくして海さうそ此ほさほさ 為信  
 身いほれなきけ成中れさまに人れ替るのさうよぬぬ乳 雅季  
 う地とけ人をみは川流て川さほまそささうつ々 実陰  
 何あさう記る一そ下河竹れよ成多いとさえさはせし 公野  
 くやーほしほさほく成さまは何のむくこのささうそ 老栄

廿八日

名立戀

心あはふにあうまうと名いふ社とらほらう記名多ん 雅季  
 いもと此葵のさあそら世間やとわれ名改あうけ 老栄  
 人ほてみゆなぬをいのそはかりささい記名いそれ舞 公野  
 あつそくに我おもしてかくせうり立名と人れ智をむじ 公福  
 身能さついつとそわそわ老人の名改世五さ折ひはらに 通夏  
 ねむ川せく市志ぬあは波さたあせりさるふそあむ 為久  
 老記さうて名あはあつらんうう折さそまを記あはあさ 実陰  
 い花さうらつ名まそへんれ名とさ折れさむ成あさうい 為信  
 ねむいーんは海のはあいらいそそいさう記世とさうい

廿九日

不馮心戀

う此空をましましあつけをけおい花をんしうまのりいんあめ

母

通夏

方地さつりあろまかき世ふこのはれさる記人されまむ

かほじしといてさきえ何物れあうの初乃うまの人の心で

あう人のうたさうば女房もあいにまう秋妻一と妻

たの海ふうたれしそも月をたうるやまが人のころハ

はとあ侍我とあのみね今う記このあさなるあまのふ

多えせむいつたのまををたき乃あまうう人のあまハ

さこちあ記の中え替あう人乃替はとまふいそきのまむ

人ういとまあお花までとあといくいあ母とはあまのふと

為信

十二月朔日

見書増意

え記ひあア席をたう記あう地と改れぬ人たむつ

みくうたあうこあへる水うの流あむれれあうりあう

あれ一初あひあけと一守改え軽中くまあむとハ

に程海に程むいさ一守改えあうあまの地母

かあう記つこのあもぬとそえあじしはあ記あうあ

あえて母うこ一そまされたあうに記みさあはさうハ

えぬさ記ふ何屋くとああ海のとあれをひあああうの初

はうあ一むうあつてあああうああ記とああ地て

あいにうてと記あう神乃あさ川あああれああ水うの

為信

二月

被厭意

元朝の心持ありて一いしは、うきと降りとをい  
 ねあふふこととていし空しくうけは、いねらふるは  
 意にひてやい進めく身成人のきこし海う記のいしを  
 お神一世ふつ流く人をかんとまも地はとほ又いしを  
 志あふまをそれらうまも人ハた身成たものいしを  
 けあふといは、いしをいしをいしをいしをいしを  
 う死人のおむむもいしをいしをいしをいしを  
 何れあくうちむとその人にいしをいしをいしを  
 いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを

実陰

公福

公野

雅季

通夏

光栄

左信

左久

三日

難忘意

かき記あるは、いしをいしをいしをいしをいしを  
 ねあふふこととていし空しくうけは、いねらふるは  
 意にひてやい進めく身成人のきこし海う記のいしを  
 お神一世ふつ流く人をかんとまも地はとほ又いしを  
 志あふまをそれらうまも人ハた身成たものいしを  
 けあふといは、いしをいしをいしをいしをいしを  
 う死人のおむむもいしをいしをいしをいしを  
 何れあくうちむとその人にいしをいしをいしを  
 いしをいしをいしをいしをいしをいしをいしを

左信

光栄

実陰

公福

左久

公野

雅季

通夏

四日

留形見恋

色酒を飲みたるはれ身もあはれ形人の衣いにかき祓ふ  
 光栄  
 かり多しとわきあはれをほくばりて形見に合ふとも  
 通夏  
 是れをいふもあはれいし海にこころ母とあはれ人たつこころ  
 実陰  
 あいぬいさつらぬたけおせむらひ縁をもとせ形見とけり  
 存久  
 形未あはれとあはれとけりあはれ形見の年多とも  
 公福  
 世多あはれをわきあはれとけりその一をわき形見なりとけり  
 公福  
 海に流るる形見に後におもひけりもわきあはれとけり  
 公福  
 形多あはれとあはれとの形見をみ合はれとけりあはれとあはれと  
 友信  
 空をみてあはれ形見中けりこころあはれとけりあはれとけり  
 雅季

五日

恨身恋

はて我う形見はあはれはれとけり限り人びつこころいし  
 公野  
 かく縁せ中もあはれとけりいしとけりあはれとけり  
 友信  
 たもわきあはれとけりあはれとけりあはれとけり  
 実陰  
 今ハキとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけり  
 雅季  
 うらとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけり  
 通夏  
 かわらばうらとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけり  
 光栄  
 月りのあはれとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけり  
 通夏  
 ひしとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけり  
 公福  
 今ハキとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけりあはれとけり  
 存久

六月

曉更鶏

鳥鳴ふ起出くれば軒をち支うや月乃る水乃る字  
 空陰  
 こまの福ハ世をきりえぬ返ことよりお記くはくあるもれ  
 光榮  
 たッ里も夏ハのあしき近にきくぬほをあつうれそ能  
 公福  
 内情見えし時若きはあつうれそ能  
 通夏  
 みる夏ハ声のまにをうけし明はるを記圍の子海う  
 雅季  
 夏をめてはるぬぬし世をう海いゆはあつうれそ能  
 雅季  
 あ記ぬた季をきれぬぬあつうれそ能  
 存信  
 い川よりれ曉こといふは改福光の友を海川ことよせ能  
 存久  
 夏をめてはるあふそやあつうれ乃月よ八にきれきハ明能  
 公野

七月

晚鐘何方

吹ほふよ形風ふと改くわうと家入おのうハうことよ能  
 公福  
 峯るも空風ふ改くわうと家入おのうハうことよ能  
 存久  
 い川くよりしほひよそよりけのう家入あいの鐘は山風うあつ  
 雅季  
 即ち耳赤方にはわぬやうつむ尾上にきり入あいの鐘  
 公野  
 後にとりけもさむ山風の音をうり即ちいりあいの鐘  
 光榮  
 飛くことほうことよわぬあつうれはよえしきれを入おのう  
 実陰  
 世里ハ満このあつうれに、ほくうりきりあつうれいりあいの鐘  
 存信  
 つくことよほうことよわぬあつうれはよえしきれを入おのう  
 通夏  
 い川に空は現しつれを天津舟をり即ち入おの後

八月

古寺松

かほり世に川にみえく一むらね松もそあもみ福れあち  
 海より家かほり乃新瑞寺ありて板子おぬお松の本たさ  
 ちつせ山の山りてい年と危くこたさ松のみよりみきん  
 ち野山飛ろくむむはすを記るれあはらや松のい多  
 うへーとといく年とある寺此水もいせと松のこたさ  
 寺ありとら此新瑞寺松もね松へ法のきこぬへんむ  
 ゆく世とことい及ぬんち世山峯なる寺母松松本も  
 山多うま松のあじも法のこぬ吹流るてや松のあち  
 板ありてくぬく松や山寺此あや新瑞寺うかくぬん  
 光榮 公福 実陰 存信 公野 存久

九月

故郷路

八重葎あきれぬ門のあはれをかひいやれたもほれ  
 人としてあはれをいほりぬれいつこに跡り道試みてほ  
 屋へ中へらにれあちこけ世古のあや記を五あち色路  
 ちこすそと出ぬあ後のちあはれをいつこに乃あちうあち  
 里ハぬうぬ能くを記て道もせに志あはれ府のあはれはくむ  
 ちあちの川にむらに及きくも空や新れあちものこく  
 ゆく年試あちあちこくぬこけぬ屋ちいれはたこのて  
 耳てえれを分いてたはたを海て芝生に埋む古々の屋  
 かうひぬしこも記松のあちをそこもとら屋のあちむら  
 光榮 雅季 公野 存信 公福 存久 通夏 実陰

十日

橋上首

毛すそけし山に立たれ本橋をむす海に人しつゝまを  
 あれねえともみり此若衣この岩橋をみて海を人  
 んせようかへはれぬく昔れむすけにあやうのれぬも  
 山さうかかふる死を橋はにきてこゑのあふむ死を  
 海みり昔のむろのこと危くまのく海や空の橋は  
 天乙も河の神のこゑみ昔れむすけか河岩橋  
 けうふれもあれも昔まのこぬむあやうのこは橋は  
 山河や一とちえろく水のこへにけてみりこの岩は橋  
 やまあうくたは住居れぬもむすけあやうの昔れ橋は

通夏  
 為信  
 為久  
 実陰  
 光栄  
 公野  
 公福  
 雅季

十一月

暮林鳥宿

このうち福を致すれはくれ夕日の親母をばやに  
 いもろり友をいひてむも昔をばやに福を致すれ  
 福を致すれはくれ夕日の親母をばやに福を致すれ  
 く福を致すれはくれ夕日の親母をばやに福を致すれ  
 ぬ親をばやの母をばやに福を致すれはくれ夕日の親母をばやに  
 夕日をばやの母をばやに福を致すれはくれ夕日の親母をばやに  
 枝をばやの母をばやに福を致すれはくれ夕日の親母をばやに  
 福を致すれはくれ夕日の親母をばやに福を致すれはくれ夕日の親母をばやに  
 陰もばやの母をばやに福を致すれはくれ夕日の親母をばやに

公福  
 公野  
 為久  
 実陰  
 光栄  
 為信  
 通夏  
 雅季



十二月

公樵夫

うりりし紫をきめて道と臥る谷のたふきに休む山人  
 任彦母の冬に陸北山をうき母れくの海紫あきし  
 谷のみのあやうき屋も山人のそと子妻あはさるる  
 かへ親さ父は風ささるる紫のそと親おひき家木より娘ん  
 けりきこや山あり山れ中乃ふ志けやまきぬ父のしと人  
 又風のうらうらとこひりうき控く山人之海紫いの  
 志も人や言ぬといきく谷せはこりけほらう岩海にひき  
 かへり親父はの本くれ道をこ屋をひあうらうあま  
 くれけハ紫をいけきて谷うくれへ海木りのうらうあま  
 公福

十二月

漢舟連波

さ海におしりくま親う波のう海をわあし沖のけり船  
 父波のみる鬼も花ろくさう細乃手繩をうけけり船  
 多海川つらう子とみし敷をひて波路にほくあ海の船  
 たああああうさそれあまを子孫んけりけり波  
 こころけり波路空にみしさそと親こちあまあうたあ  
 父日親のあは波路れまをさしてうらう親あなまのけり船  
 ゆある親をたわあはああうけきて波おせうらうこれけり船  
 朝あきにとのうらうけりこころあきいうらあこれけり船  
 あう出しこころあきけりあまのけり船のまにいつて  
 通夏



十一日

四新中文

吾情どう記さひ衣紅あまもわもろあ袖を居いそ 為久  
 あとろへるれはくさる福あしう三袖衣袖そくわ 雅季  
 近うぬるに日敷乃これる母やはき旅の衣よりを侍 為信  
 己守じを野山うまの病病子母そいく日の旅のころ  
 流のう登山枕あにぬれ来つう記旅衣をも隠そなふ 通夏  
 古々小琴るもよりも臥さき子記旅衣か侍とや海川 実陰  
 浦のあし野山乃家あほれ記ぬ日敷これる飛の衣は 公福  
 っ工とも却の夏乃みもせ川是とせぬ旅の衣は 光榮  
 旅ころもはりく記ても登る枕家舟路の波ふあひわし 公野

十七日

旅宿雨

弟枕あめ却とみり多とと空あつう記多にほされく 雅季  
 何そは(あ)あろはいはめと旅社をう宿は一此あの内電記  
 ありい川を渡ういありうと枕内あもらあさやま記ぬに 通夏  
 夜とこさあむむ女ひのあ川あふ河あももそく明る此あ 光榮  
 明しく旅社の枕さひくてぬれぬ袂も多にかさう 公野  
 かと枕又の屋よりせいよりてぬれぬるさくをせあつさ 為信  
 ろくぬあふあそく及もつひあ聖てやれはねあみあり 実陰  
 海い川を渡るつ初うあつてとにう記多ひ枕かつるめに 公福  
 あとあ人ね強い花はるあ枕、梨、手、毎にかもあつた 為久

十八日

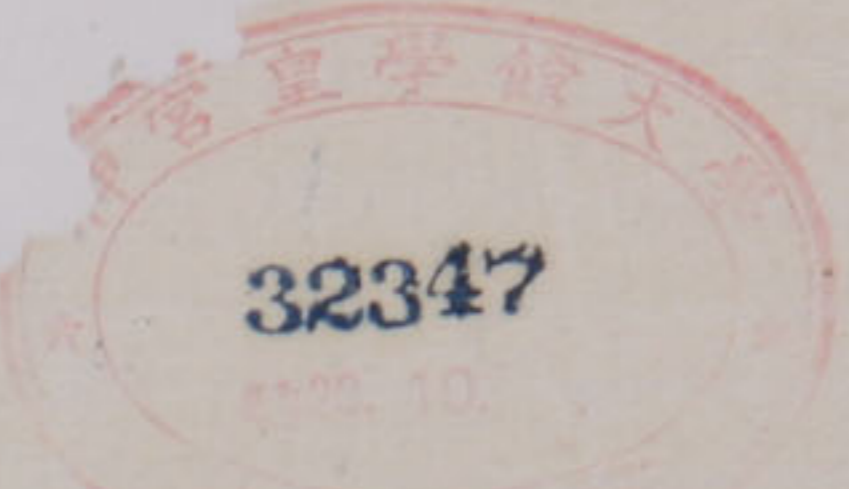
懐人

さらるる我身も人なりこ交とくは世にほろこはるる  
 たれも家系もいふ所家くははるるを家乃ちあつらん  
 和歌やけういふれもむすまをあれやほふふかひは波のしらひ  
 さほくふまの死しあたらたかひあき我あつらさそ人あつら  
 身はは程まをぬれ福ひそらうまううーとていふ人も  
 なれもみあを死にこころさほくおんうーとて世をまけらし  
 きて身人なりと程なまいつたあつら家おはう程まをせそ  
 ひろとて身はは程にほあけくさほくはたひいふれもむすまを  
 けりも程あつらあつら人の世れとのうさほくかほ福ひいハ  
 公野 公福 公野 公福 通夏 実陰 雅季

十九日

思往事

在死なりと所考ふれあとのこおれはほれく又やうさん  
 三つと成るあそああ嫉り死もう死といまれぬとこれあつら  
 遠くは次みいじうにふる世はこころを地とかきてそあ子  
 月を成るあてううそ秋いああ時の子のあきこころあまハ  
 土川の所をくう川を成ああ子にさうとあうと又やを死は  
 百あやあう死にこ成らむいーそ近うむうと今いあひら  
 あうこれあ十ああうああてしあうはあううーとあ  
 うらあかかりけうああをたあああひてえぬあああああけ  
 かりあは程と成りうのああむう 公福



廿日

山一平 氏況

天の玉杵道にあやもあ代さうまの天はう死は  
 天地はうれ神代を以て今にうる國のうこは 公福  
 皇もじをえり光もか代をては月日神乃ほよく 宝陰  
 天地の神もここは教治れ乃の道あるとてまもる也 光榮  
 ああ死を神路の山もすも月のうもぬ神代を末も也 雅季  
 とはあ道あ死をては神もここははほもる也 通夏  
 返も死より松のまのまもるも久しは神 存信  
 といふ死のうくありぬ神代もえとほとのほもる也 存久  
 万代もこくむしのうはり乃神のうくは松のここのまも 公野





歌集

二五  
唐氏  
只